

# 会報 峠 とうげ

河井継之助記念館  
友の会会報

第10号記念号

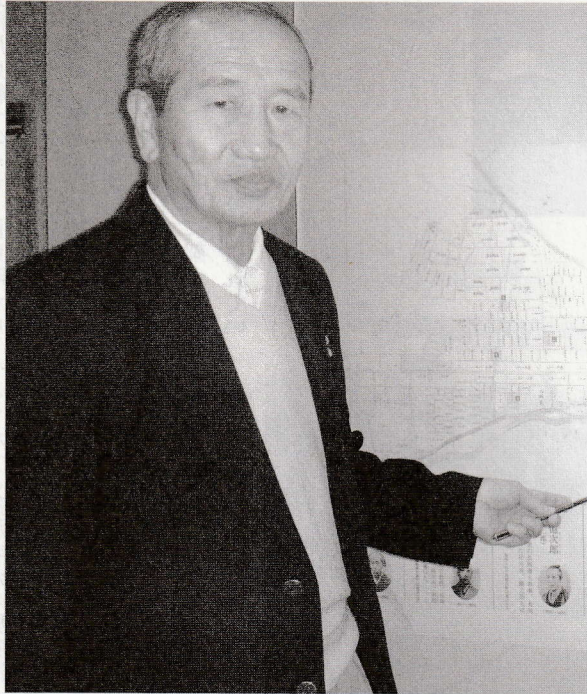
2011.12

編集・発行  
河井継之助記念館  
新潟県長岡市長町1丁目1675-1  
〒940-0053  
Tel.0258-30-1525  
Fax.0258-30-1526

頒布価：50円（送料別）

## 八十里越え

河井継之助記念館友の会会員 野村 一敏



パネルの前で説明をされる野村一敏さん

郷土史に全く無関心だった小生の戊辰の役との関わりは、今から約四十年前に遡ります。会社の小集団活動の総会記念講演で、長岡城落城の様子を若き郷土史家（現稲川館長）から伺った事に始まります。当時の長岡藩には、河井継之助なる豪傑がいて財政改革により十二万両を蓄財した事、落城時にはお城の大広間に積んでおいた

千両箱を馬で運び出した事、その折に積み荷中の金貨がお堀にばら撒かれた事、その金貨を拾って俄成金になった人がいた事、二度目の落城で八十里越えの折に二朱金貨が谷間にキラキラと舞い落ちた事、松の木の根元に運びきれない金貨を埋めた事…。当時、金欠病が常の愚者の脳裏に焼き付けられたのですが、日ごろの忙しさに紛れ

て全く気にも留めていませんでした。リタイヤ後、縁あって河井継之助記念館友の会に入ったことで埋蔵金のことを思い出し、八十里踏破の機会を狙っておりました。昨年、の只見法要の折、八十里越え経験者の高橋一馬様より三条の「八十里越え友の会」が毎年二回峠越えを実施していると聞いて早速参加してみました。

八十里越えは一里が十里と思えるほどの難所との事。事前準備は東山散策と山古志ウォークで仕上げた。平成二十二年十月二十四日、約七十名の参加者は、四時五十分以下田庁舎前に集合して吉ヶ平に向かいました。吉ヶ平分校跡地グラウンドで挨拶と注意事項の説明があり、午前六時に朝霧の中をスタート。怪我をしないように体をほぐしながら進むと約一時間で椿尾根に到着です。番屋乗越、ブナ沢、空堀と右手に守門岳、烏帽子を望みながら順調に進みます。鞍掛峠を越えたと眼前に黒姫山が見え、お昼の田代平までは約一時間です。この街道は、縄文時代からの生活の道だった古道と戊辰戦争当時の道、そして国道二八九号線の新道がそのまま残されているとの事。なるほど所々に道幅の広い立派な道があることに驚かされますが、冬場の降雪による崩落です。たずたの状態です。昔の人々のご苦労

が偲ばれます。午後からはいよいよ越後と会津の国境となる木の根峠です。ここまでは埋蔵金伝説の松の木が全くないブナ林でしたが、この峠付近は尾根筋に松の木が見受けられるようになってきました。いよいよ確信に近付いたかと胸を高鳴らせましたが、松の木は、道に近い所でしたが、離れすぎていたりして、誰も見つけ出せないような所には影もありません。もし街道に近い場所に埋めたとしたら、地元の人ですぐに見つけ出すことが出来たのではないかと思われました。山の神から大麻平までもブナ林が続き、只見はブナの森林に囲まれておりました。十時間に及ぶ山行も、同好会会長水品様のご尽力により、脱落する事もなく無事終了することが出来ました。現在は下田より叶津までトンネルで繋がっており、取り付け道路さえ完成すれば車で数十分の距離になるとの事。この歴史的遺産とも言える八十里越の街道は何時までも残されるべきものと深く感じ、再度踏破してじっくりと戊辰の悲哀を噛み締めてみたいものだと思っております。

野村 敏（のむらかずと）プロフィール  
昭和17年（1942）長岡市生まれ。  
長岡観光ボランティアガイドの会副会長、  
河井継之助記念館ガイドボランティアとして活躍している。

## 峠抄 とうげしょう

東日本大震災に伴う長岡市の夏の節電対策の一環として、当館では夏休み期間中の無料開放が実施されました。蝉しぐれが響く中、遠方より足を運んで下さった方「近所だけけど初めて来ました」とは、かんで来館された方：より多くの方々から記念館の存在と継之助の強い信念に触れて頂く良い機会となりました。期間中、個性豊かに熱い思いを語って下さったガイドボランティアの皆さんの説明も好評でした。

閉塞感の強い時代だからこそ先見の明を持ち、激動の時代に勢力均衡を図ろうと尽力した継之助の情熱は私たちを惹きつけるのでしよう。彼の生誕の地で展示品や説明パネルを前に早逝の先人の足跡を辿る―そんなゆったりとした対話の時間を楽しんで頂ける館でありたいと願っております。

日脚も短くなり、日増しに冬の気配が感じられるようになってきました。面影の庭の風情に浸り、継之助の心境に思いを馳せてみては如何でしょうか。

（雙田）

## 特集 勝鬨をあげ、いざ八丁沖を歩かん!

十月二日、友の会主催で初めての「八丁沖ウォーク」を開催した。当時は「魔物が棲む」と周囲の人々から恐れられていた沼地だが、今は田園風景が広がる。国道三五一号線につながる百束町から富島・宮下町を通る「農免農道・長岡川東線」のうち、百束町から八丁沖のほぼ中央を経て富島町に至る道は、奪還の際に渡河したルートとだいたい一致しているという。そのため猿橋川に架かる橋は「八丁沖橋」、山北川に架かる橋は「はしご橋」と名付けられている。

当日、百束公民館を出発し、富島にある八丁沖古戦場パークまでの道のりは約四キロメートル。先導役と所々でのガイドは地元の有志の方々がされた。道すがら、当時が偲ばれる湿地が残っている辺りの説明を聞くと、「歩いてみようか」と参加者から興味津々の声が上がった。ゴールの八丁沖古戦場パークでは力強い勝鬨を上げ、全員で「上陸」を果たした。今回の「八丁沖ウォーク」を提案され、助言してくださった田所さんにその想いを伺った。



はしご橋



八丁沖橋



田所仁さん



上陸記念集合写真

### 故郷の歴史を再認識

友の会理事 田所 仁さん(八十一歳)

「八丁沖のそばを車で通るけど歩いたことはない。いつか歩いてみたいと思っていた。」

何故かという問いに「小千谷市には慈眼寺があり談判が行われたことを学ぶことができる。長岡には史跡、八丁沖がある。そこを歩くことで、故郷の歴史を知って貰いたかった」と話された。八丁沖は北越戊辰戦争でも特筆される奇襲戦が行われた土地だ。軍事総督河井継之助の綿密な計画と際立つ



秋風の中、八丁沖を歩く兵たち



星さん等による勝鬨

た采配により長岡城奪還に成功する。田所さんは、「わずか四日間、奪還だったが尊い勝利だった。気持ちの上では負けていない」と力強くおっしゃった。城を奪還したとき、城下の町民らは喜び長岡甚句を踊って歓迎したといわれる。この奇襲による奪還戦が、後に焼野原となった長岡を再興するにあたって一種の自信となり勇気を与えることになった。一度落城した城を奪還するということは、

近代戦史の中でもめずらしいことなのだ。田所さんは「長岡に河井継之助という傑出した人物がいたこと、そして八丁沖がいかに重要な地であったかということ、歩くことでみんなに再考してほしい」と強調される。当日、県内外から集まった総勢八十名の参加者に対して「皆さんの熱意を感じて嬉しかった」そして、ご自身は「当時の人に思いを巡らせて歩いた」と言われた。

地元の方の協力で狼煙を上げる演出や、当館友の会理事で「米百俵まつり」などでも活躍されている星貴さんらの衣装を纏っての力強い勝鬨は、参加者から当時を体感出来たととても好評だった。田所さんも武將姿に：この時の写真は「年賀状に使うかなあ」とにっこりされた。

### 子供たちと学校の取り組みに期待!

「まちの駅」の駅長としても活躍の田所さん。インタビュの日、市内の中学生が熱心に館内を見学していた事を伝えると「自分の住む『まち』を知ることは、とてもよいことだと思おう」と目を細められた。市内の学校では劇や総合学習を通して、長岡の歴史を学んでいる。「子供たちにも八丁沖を歩いて欲しい、故郷を大事にしてほしい」と希望も語っておられた。

## 八丁沖ウォークに参加して

### 「八丁沖と西田さん」

東京から八丁沖ウォークに妻と参加させていただきました。なんと、そんな遠くからこのようなマニアックなツアーに参加したのか不思議に思いませんか？実は、私が河井継之助のファンになったのも、またいつかは八丁沖を渡ってみたいと思ったのも、昭和57年(当時小学6年)に放映されたNHK大河ドラマ「花神」の影響です。そして、ドラマの中で今でも忘れられない話が、八丁沖渡河による長岡城奪還です。その理由は、西田敏行さん演じる山縣狂介が、長岡城で継之助の奇襲の知らせを受けて「くそー河井め、八丁沖を渡ってくるなんざ正気じゃない!!(こんな感じだったかな?)」と揮二丁で慌てふためきながら着替えるといった、ドリフのコントのようなコミカルなシーンが子供心を強く引き付けたからだと思えます。それが「いつかは八丁沖」という私の憧れになったのです。ですので、私にとって、河井継之助といえば「峠」よりも「花神」であ



八丁沖橋にて

り、八丁沖といえば、「高橋英樹」さんよりも「西田敏行」さんなので、  
今井 裕一(東京都調布市)

### 八丁沖ウォークに参加して

「エイ、エイ、オー、」勝鬨の凱旋歌?が秋の澄み渡った八丁沖跡地に高らかに鳴り響いた。「八丁沖」は、かつて継之助二行七百余名が、長岡城奪還の奇襲攻撃を掛けて勝ち取った大激戦地でした。その沼地跡を参加者80余名でウォークキングして参りました。途中色々、当時の様子等の説明を受けながら「八丁沖橋」や「はしご橋」等を経て、約2時間のコースでした。最後に八丁沖渡河の立役者、鬼頭熊次郎の供養塔を参拝し、記念撮影をして解散致しました。下田会長、理事の星様そしてスタッフの皆様、大変お世話になりました。(合掌)

高松 平(福島県河沼郡)

### 奪還ルートを歩いて

「八丁沖」当記念館で戊辰戦争を学ぶまで知りませんでした。(ちなみに私は新保の生まれでして富亀小学校を出ておりますので、富島、亀貝、よく遊びに行きました。不思議な縁を感じます)長岡城奪還の成功の影に想像を絶する事が行われていたのですね。そのこ

ろ湿地、沼地だった(今は面影もなし)道を今回は田圃の中の砂利道を通らせてもらい、途中で猿橋川の土手に上がり農免農道に新しく作られたはしご橋、八丁沖橋(なおこれらの橋名は長岡城奪還ルートにちなんでつけられた)を渡り舗装された道路に出て富島にある戊辰戦争記念碑、日光社にお参りし無事80余名完歩できました。途中まだ葦が生えた沼地が残っている所を館長に教えていただき、とても私には渡れない、側によれないそんな場所でした。長岡藩士7百余名こんな所をよく渡れたことにまた改めて藩士の豪儀さを痛感しました。東京からと会津より参加していただき先人もさぞかし喜んでおられることでしょう。武者装いの方々の恰好よき、抜刀、納刀の技&パフォーマン스에ちよつとびつくり、でも感動しました。

南波 光子(長岡市)

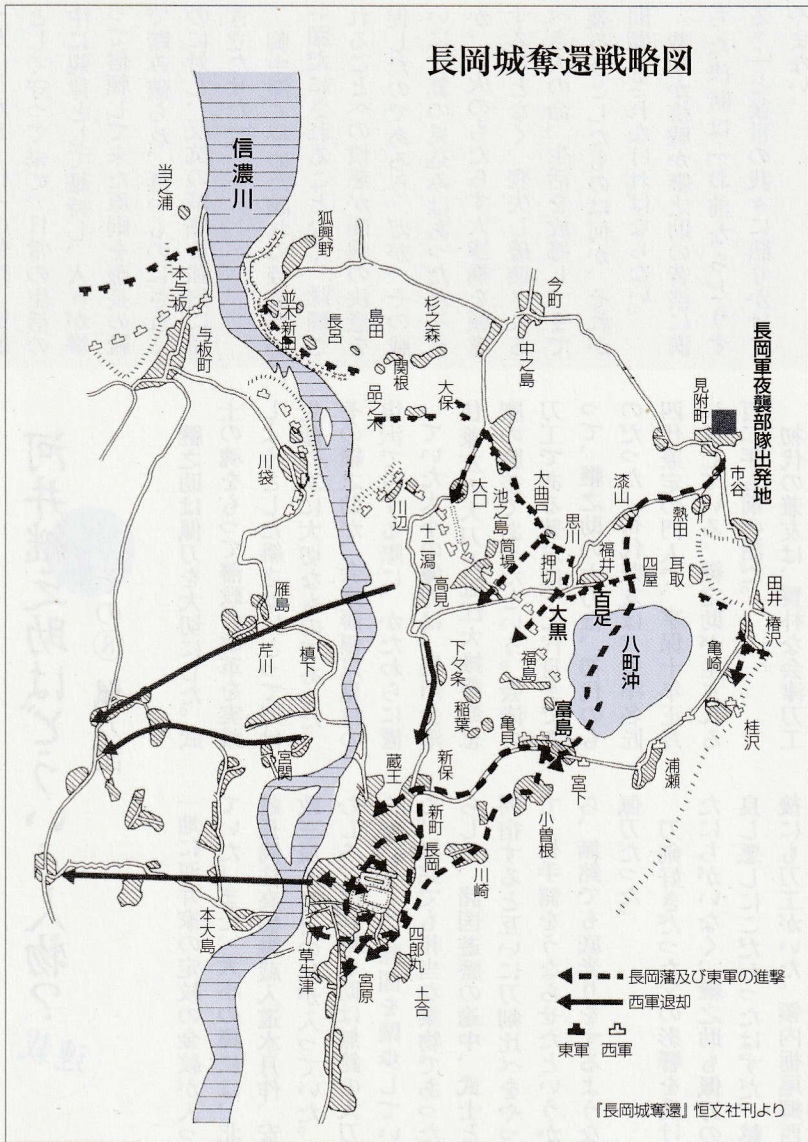
### 八丁沖ウォークに参加して

10月2日、百束町公民館に集

まった80名は袖に五間梯子の合印を付け、当時の軍装の米百俵メンバーの音頭で鬨の声を上げ出発。昔の八丁沖を渡り富島町までの長岡城奪還ルートに沿って歩きました。八丁沖は今、見渡す限りの美田。遠くに昇る狼煙は敵(西軍)の保塁を示す演出。八丁沖橋の継之助のレリーフを見て、富島町の日光社に無事到着しました。そこで稲川館長の興味深い解説を聞き、楽しくも有意義な一時を過ごしました。

広川 潔(長岡市)

## 長岡城奪還戦略図



【長岡城奪還】恒文社刊より

特別寄稿

# 河井継之助との出会い

和歌山市 宮 本 尊 生



なにゆえ 敗けると判つて いるあの戦争に 邁進したのか、一藩

を 焦土となしてもあがなうべき価値がある と判断したあげくの意思

決定だとしても、責任ある地位の武士の振舞いとしてどうか、これが いまだに解けぬ疑問であり、その解を求めて長岡詣でを今に 続ける理由なのかもしれない。

思えば長いつきあいとなった。大体、長岡駅頭に初めて降り立ったのは、今から三十五年以上前、正確なことは忘却の彼方であるが、仕事で北越銀行を訪問したのが皮切りである。他行訪問はその後も続いたが、最初の訪問が北越銀行であったことは、現在にいたる長い長岡人との交流から思い起こせば、暗示的・運命的なことだったかもしれない。

その後「峠」に触れ継之助の事績を知ったころ東京に転勤となり、近くの安藤英男氏に知遇を得る好運に恵まれたのである。氏は未熟で性急な私の質問に対して、いやな顔もせず丁寧に応答され、また氏が校注された「塵壺」

(東洋文庫)を頂戴したが、今も大切な資料として書架にある。「賤ヶ岳古戦場」等歴史探訪に行したこと懐かしく想起される。長岡へツーリングする際には貴重な情報を教示いただき、長岡との縁が急速に深くなった。同氏が顧問をつとめられた「河井継之助を偲ぶ会」が昭和60年に発足。多忙な時間を割いて長岡に駆けつけたことも懐かしい。回を重ねるなか集う顔ぶれは固定化した。手造り感あふれるこの集いは心地よく好きだった。この「偲ぶ会」はその後現在の「友の会」に繋がる。

斬れば血の出る生身の人間も同時に社会的・政治的な存在である限り、様々な規範に従いながらも、自己の価値観の実現を目指す。継之助が構想した政治的抱負は、結果として越後平野に驚天動地の戦乱を呼び込み、天下の大兵を引き受けてしまったのだ。

大仏次郎著の『天皇の世紀』十巻に「追い詰められて、彼はかねて用意だけはしてあった新鋭の武器を用いて、武門の意地を官軍に示しつける覚悟に飛んだ。武門の意地など、実は彼は信じていなか

った。しかし、代々の倫理、道徳として守って来て、日常の生活の中に規律として維持し、人々が拳つて信頼して来た原則を薩長の靴で踏み破られ、無いものにされるのに対し、反抗の情熱を強烈に湧き立たせた」。

胸中深く秘めた譲れぬ価値観が一顧だにされることなく、蹂躪されることへの憤怒が開戦の決意を促したのである。だが、その戦いに成算の見込みはあっただろうか。戦火のもたらす大惨禍を顧慮することなく、喪失し破壊されるべき人の命、生活を放擲してまで護ろうとしたものは何か、それが問題とされなければならない。

恭順か抗戦か継之助の苦渋に満ちた決断は「お前ならどうする？」と後世の我々に語りかけてやまない。

幕末の動乱期に長岡藩の名譽と自存をかけて、懸命に生き抜こうとした彼の誇り高い生涯を、越し方を顧みるべき落陽の身に、この寄稿を機縁として追憶したいと思うのである。

宮本尊生(みやもと たかお)プロフィール  
昭和14年和歌山市に生まれる。昭和36年中央大学法学部卒業。平成6年紀陽銀行を定年退職。平成12年和歌山東社会保険事務所を任意退職。計38年のサラリーマン生活を終え、現在「河井継之助記念館友の会」、「長岡郷土史研究会」会員。

「河井継之助のすべて」(安藤英男編、新人物往來社)に「八十里峠を行く」(尊生文芸第十八号)に「継之助と方谷」を発表。

# 河井継之助はどういう人物?

その⑧ 佩刀記

連載

継之助は佩刀を大切に持った。武士の魂をもって藩政の改革を實踐しようとした継之助にとって刀は生命の次に大切なものであった。その継之助が、会津藩領只見村の塩沢で没する際に、かたわらに置いていた大小の佩刀は、奥州会津住兼友の大刀と近江大掾藤原忠廣の脇差であったという。会津の刀工である兼友は、七代目まであって、継之助の大刀は、初代のものであった。初代兼友は、会津名匠四代兼定の門人で、享保十年正月に没している。継之助が生まれる百二年も前の話だ。

初代の兼友は、質朴な会津刀工にはめずらしく、互の目の乱れが涛乱刀に近い華麗な刃文であったというが、この傑作を継之助は会津藩主松平容保公から拝領したものだとしている。とするとどこで継之助と会津公の接点があったのかを考えると、眉唾ものではある。たぶん死後、会津城下建福寺の葬儀の際、会津公から賜ったものであろう。しかし、この大小の刀剣は、大正年間、遺族から長岡市の某家に渡った際には、縁頭・小柄・筭・目貫ともに魚子の四分

一地に河井家の定紋の金紋が入っていた。また、大小の鐔には、北越長岡住高橋幾藏入道水月作、安政三辰八月日の銘が入っていた。むしろ、河井継之助は無銘の大刀を腰に差し、諸国を闊歩していた。無銘でも相当な業物であったらしく、諸国遊歴の途中、武士と同宿すると互いに刀剣比べをやって、相手側をうならせたというから、無銘でも底光りをするような佩刀だった。

刀剣好きだった父の影響を受けたにちがいない、継之助も佩刀の良し悪しにこだわったはずだ。越後にも刀工がいた。領内栃尾郷西中野侯の藤原兼宗である。ほかにも刀工がいたと思われるが、作刀で伝わっているのは兼宗が著名である。姓は金安、名を勘五郎という。とにかく、たたく切れるような豪壮さが、兼宗の持ち味だった。新選組の土方歳三が持っていた和泉守兼宗のような凄味が、兼宗にはあった。兼宗はほとんど野鍛冶に近かったから、銘を刀身に彫らなかつた。そんな刀を継之助は帯びたであろう。旅日記の『塵壺』に、出会った人と互いに帯び

た大刀をみせあうことを記述しているが、とにかく継之助の刀剣は見事なものであった。

継之助の佩刀は、何本かあった。只見の塩沢で没した際、帯びていた大小は無銘で、その後、長岡の河井家に帰還している。従僕の松蔵が、大切にした大小も何らかの伝手で、長岡に帰った。その松蔵が持ってきた大小は、会津中将松平容保が葬儀の際、骨箱の脇に備えたものである。会津の刀工になるものだが、これがのちに長州藩士に渡っている。

陸軍中将の松本鼎は長州藩士で、かつて戊辰戦争の際、奥羽各地を転戦している。その松本が、なぜか河井継之助の佩刀を所持している、大正四年（一九一五）に記している。その佩刀記によれば、「北越の河井蒼龍窟の大刀を、故あつて余が手に帰したわけだが、手にとってみれば長さ二尺三寸、幅一寸二分、そりが一分の大刀だ。両刃には薄らと血漕ぎの跡がある無銘の業物である。私はこの大刀をもって、日清・日露戦争に従軍し、戦った。この刀がなかったら、偉勲はあげられなかった」とある。



北越長岡任高橋茂助  
河井作安政三辰

## 「塵壺」を読む

8 連載

三貨主義は日本の貨幣制度であり、おおむね関東や武家社会が金を使うのに比べ、関西や商業は銀銭が中心だった。伊勢あたりはちょうど金と銀札が交わり、六月十二日の益暮勘定の際、清算が行われるシステムができてきた。もともと、日本は貨幣の製造能力が低く流通量が少なく、当然、決済の期間を長くしたり相互殺害することでおぎなっていた。それから、金と銀の相場は、ほぼ一定であった。金一両が銀六十四匁の固定相場だったものが、幕末に至って、きわめて大きな変動相場が動き始め、貨幣を補うために銀札を各藩が発行したが、その価値がちまちま暴落したのである。

継之助が旅をした安政六年は外国との通商条約が締結した直後であり、急激な経済変動の真っ只中にあつたのである。その変り様を津城下で継之助は、二人の庄屋風体の者に聴くのである。「銀札を金に引替える由、米を一切、金にて取扱い、銀は用いずと。妙なる事なり」継之助は長岡城下の商人が、西国の商人と銀貨で取引をすることに慣れていた。それは当然のものと考えていたし、銀を金に

両替して米を買う話などもあたりまえだと思っていた。ところが、銀の暴落によって、銀札が通用できないことを知ったのである。ただ、このときはそういう仕組みがどンドン進んでいることがよくわからなかった。その後、京・大坂・中国・長崎を旅して、日本の開国が関係していることがわかってきた。それに日本の輸出産業が充実しないうちに開国策を採ってしまった幕府のせいだと知るのは、旅の後半だった。ただ、津城下では拙堂が始めた操練のためだった

り、役所の存在が障害となつていと疑ったり、紙札の信用の問題だともいつている。このテーマは西国遊歴の中で、継之助が日本の貨幣制度の害を知る機会となる。この視点を二人の庄屋風体の人物から知ったことが、山田方谷のもとに至って経済の仕組みを知ることになる。

その後、再び斎藤拙堂のところに行き会話をした際に本音がでてしまう。拙堂は「僕は近く熊野あたり湯治に行くが、それまでの間、津で勉強をしてみないか」と誘うが、継之助は思わず「これより帰路に上る」と答えてしまう。伊勢から上るは京へ行くように受

けとられるが、帰路とは帰国を意味しているのではないだろうか。先生はその決心を知り、「心に任すべし」とどまらぬ勉強しなくとも良いとしてしまうのである。拙堂は継之助を尋常な人物とみなしたから、しばらく手元に置きつつたのである。継之助にとつては拙堂から学ぶべきものは少ないと判断した結果であった。それにしても、継之助の嘘は堂々としていた。

伊勢の参詣は、両親の土産話にもなるので継之助は旅を急いだ。途中、松阪城下を通過して三井家の邸宅や店舗などをみて感心している。「其の構え、格別の事なり。繁華な所なり、紀州領にて、御用金、辞する事なし」とあるは三井財閥の萌芽であるが、それを見破ったかどうかはわからない。ただ因みに河井継之助が戦没し、長岡に金融システムが必要になり銀行が設立すると、三井系銀行と連携を組んで三菱系銀行に対抗したところが面白い。

伊勢神宮への初穂料は百疋。一疋を二十五文程度とすると二千五百文。一分以上の金額だから少なくとも。初穂料とはいわば坊入金といったらしいが四貫文以上もかかったという記録もあるが、伊勢参詣はお金がかかった。それに見学には外宮御師の縄張りがあつ

て、継之助としてそれに従わざるを得なかった。初穂料と口上を添えて美男の御師と出合い「外宮」に参詣した。「遷座の次第など、如何なる訳か、わからぬ事なり」とは継之助のいつわらざる疑問であった。内宮一見の浦などを見学の後、紀州廻りで大坂へ出ようと考えたが風向きが悪いために引き返している。

継之助が伊勢参宮のち登ろうとした山がある。朝熊山である。朝熊山は古くから死んだ人びとの霊が集まる霊山として知られていた。「お伊勢参らば朝熊をかけよ、朝熊かけねば片参り」と唄われるようになった。継之助はそんな所へは行かなくとも大体わかるとして見学しないところが面白い。継之助は伊勢詣ではしたが、迷信とか祈祷とかというものには余り興味を持っていない。

その後、東海道に戻り、大名行列に出会うとバラバラな行列、主君の駕籠脇の危さや、小姓も居ない勝手な行列、御伴の多少や、鎗、特に二本差しはいたく脇差だけの大名行列なども各諸侯の特色を眺めている。

持参した望遠鏡を使って、眺め得たり。そして、河井家の先祖が仕えていた膳所の近くを通過して、京に入った。

(稲川)

## 西国遊歴の旅 その一 ●パネル紹介

二階展示室にひとときわ目立つ日本地図。継之助の遊歴した道筋がひと目でわかる。安政五年（一八五八）の暮れ、二回目の遊学に江戸へ向かった継之助。翌年六月、山田方谷のもとで藩政改革の方法を学ぶために備中松山をめざす。さらに中国、四国、九州まで足を伸ばし、十一月に再び備中松山に戻る。そして約四か月滞在した後、山陰をまわり、京へ出、桜田門外の変を聞くと急いで東海道を

通って四月に江戸藩邸に帰るのである。旅の様子は、六月七日から十二月二十二日まで書かれた旅日記『塵壺』や、両親などに宛てた書簡からうかがい知ることができ。五十両もの大金を無心した両親へ報告をかねて記された『塵壺』は、継之助が感じたことや考えたことなどが思いのままに綴られて、人間性がにじみでいるといわれる。パネルでは、旅先での心象、経済の実態を知ろうとする



旅先の心象を記録した『塵壺』のパネル

観察眼、方谷から聞いた話、そして意外な内面などが表われている日記を抜粋し紹介している。今回は、方谷に出会った日記までの中からいくつかあげてみる。

### 六月十三日 晴降相半 蒲原

「実に三島より此の方、富士のため、女子のごとき不決断となり、自ら歎息す。この心、筆に尽くし難し」

富士山に登りたいが、悪天候のため登るか否かさんざん迷い、何度も「意を返し」、「終に志を遂ぐる」と能わずと覚悟を極めた。決めかねている自分自身を歎いている継之助の意外な一面が垣間見られる。

### 六月十七日 晴 御油

「江戸の焚炭屋に逢う。熊野より出る処、最も善しと云う」

浜松を立てて出会った焚炭屋から聞いた話を書いている。このように道中で出会った商人や、農民、武士、同宿した人などに気軽に声をかけ、受け入れられている様子が『塵壺』に度々出てくる。好奇心旺盛な継之助が対話によっても情報収集していることがわかる。

### 七月十四日 晴 (片山)

「義士の寺あり。四十七士の墓あり。前に二本の古松ありて、その碑あり」

赤穂で遠くに城が見える好風景

を見て、元禄の時の江戸での大変を慮り、赤穂藩主浅野家の菩提寺・花岳寺に参詣する。その後、塩場へ行き塩作りを観察したり、値段を聞いたたりする。継之助の経済に対する強い関心がわかる箇所の一つだ。

### 七月二十一日 晴 花屋

「頼母子の談出づ。士は士、百姓は百姓、町人は町人、それぞれ仲間の外、堅く停止、改革の一なりと云わる」

「財と文武と富国強兵、兼ねるの勢、兎角、財のみにかかると、文武すたれると山田の咄」

記には月日と天候のみの日も少ないが、八月十七日の日記に「夜、明月。先生より月下に咄を聞く」とあるように、度々城下へ行って多忙な方谷からじっくり話を聞いた様子がうかがえる。

### 方谷が藩主の命により江戸へ上ることになった期間を利用して、

継之助はさらに西へ行くこととし、九月十八日、約二か月逗留した備中松山を後にする。方谷が帰郷し再び教えを請う日まで、継之助の諸国見聞の旅は続く。(神保)

### 参考文献

- 『塵壺 河井継之助日記』安藤英男校注
- 『河井継之助の足跡を辿る』池澤寛著
- 『河井継之助』稲川明雄著

河井継之助記念館

ホーム 記念館 展示品紹介 河井継之助 幕末の長閑 友の会

メニュー

ようこそ河井継之助記念館へ

**ホームページが新しくなりました!**  
 情報を提示するホームページから  
 情報を発信するホームページへ

継之助の『蒼龍窟』から蒼い色を重視したカラー構成にしました。トップページの上部、河井継之助記念館の左横には継之助の家紋「丸に方喰」表示し、文字の後ろの背景には蒼い龍のうろこをイメージした素材を使用しています。

**URL: [tsuginosuke.net/index.php](http://tsuginosuke.net/index.php)**

**ツイッターの導入**  
 ツイッター上で「継之助」というキーワードを自動的に検索し、トップページに表示されますぜひ皆さんも「継之助」についてツイート(投稿)してみてください!

**ブログ機能の充実**  
 新たに記念館のブログ(日記)にコメント機能を設置しました。行事や記念館の様子、事務局からのお知らせを発信していきますので、チェックしてみてください

**カレンダー機能の追加**  
 トップページ下段には、記念館の予定を載せました。講座の予定や、行事も一目でわかります。

## 交流研修旅行

九月九日、第五回友の会交流研修旅行『会津歴史探訪』を開催した。今春、赤瓦に葺き替えられた鶴ヶ城の見学や本光寺で営まれた長岡藩士殉節弔霊祭への参列。参加者からは『会津の方々、長岡藩の為に弔霊祭をしてくれて感動した。今なお、会津藩と長岡藩の絆の強さを感じる』との声がかかれた。会員同士又会津の方々と交流を深める楽しい旅行になった。

(松山)

### ●会津歴史探訪旅行に参加して

今回の会津旅行は晴天に恵まれ、私にとって楽しく有意義な一日でした。午前中の新装なった鶴ヶ城見学は歴史と写真好きの私にとって宝の山に飛び込んだ様な気持ちで被写体を追続ける中、昼食会となりました。午後は気分一転、会津の方々の丁寧な法要に感激、一四三年前此処会津の地で命を絶たれた長岡藩士四十三名の無念を想い忸怩たる気持ちで一杯でした。終わりに今回の企画をされた方々、又準備引率された事務局の皆様有難うございました。

太刀川喜三(長岡市)

### ●粉菓子と人情と

九月九日、長岡藩士殉節弔霊祭に初めて参列した。会津落ちの経緯は少々の知識としてあったが千人近い兵や家族を当時の会津人達は迎えてくれた。東北列藩同盟はあったとはい、乍ら、一般村民は単に他人の筈。哀れに見えたのだろうか、その

心根の暖かさが肌寒い初秋の風から守ってくれたのだ。そしてその心は百四十数年間面々と紡がれて法要の引き出物は粉菓子という伝統もその

まに。人情はかくあるべきと肝に銘じた旅であった。  
久保田哲夫(小千谷市)



会津本光寺での法要



鶴ヶ城を見学



長岡藩士殉節之碑に墓参

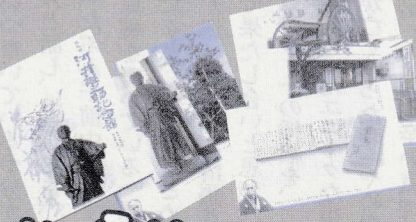


長岡藩士



鶴ヶ城をバックに記念撮影

●記念館オリジナルポストカード販売中!  
(5枚組、パッケージ付300円) 郵送も承ります。



## おしらせばん

●河井継之助記念館  
開館5周年記念講演会のご案内  
日時:12月27日(火)午後6時30分開演  
(午後6時開場/午後8時終了予定)  
会場:長岡グランドホテル 悠久の間  
(長岡市東坂之上町1-2-1)  
講師:工藤美代子氏  
演題:山本五十六の生涯と河井継之助

- 司馬遼太郎著『峠』を読む会  
毎月第3日曜日 午後6時30分~8時
- 河井継之助旅日記『塵壺』を読み解く会 好評開講中  
毎週土曜日 午後1時~3時
- 今泉鐸次郎著『河井継之助傳』を読む会  
第2・4日曜日 午後1時~3時
- 楽しい詩吟教室:第1・3日曜日 午前10時~11時30分  
詳細は記念館へお問い合わせください。

## 会報『峠』10号記念号発刊

### ●職員紹介

お陰様で河井継之助記念館は12月27日で開館5周年を迎え、会報『峠』も10号記念号発刊の運びとなりました。これからも、会報や研修旅行、さまざまな行事を通して、皆様との触れ合いを大切にしていきたいと思ひます。そしてスタッフ一同、継之助の人間性に触れ、学び、河井継之助を身近に感じられる記念館を目指し、気を新たに努めたいと思ひます。今後ともよろしくお願ひします。



継之助像とスタッフ一同

上川正善さん(62歳)  
福岡からご家族でお越しの上川正善さん(62歳)にお話を伺いました。  
来館のきっかけは?  
若い頃から司馬遼太郎の書籍はほとんど読み、なかでも『峠』は何回も読み返していたので、一度来てみたいと思っていました。  
17歳の時、陽明学で志をたて真直ぐに進む強い心に魅かれます。『峠』の文中にもあるように継之助が江戸に旅立つ部分で越後の雪深いイメージは強烈でした。相当強い志と情熱、それに



平成23年9月7日

上川さんは司馬さんと継之助の大ファンだけに「息子が生まれたら継之助とつけようと思っていた」と話され、実際、男の子が生まれると長男は継之介(継之助の助ではなく介の字)、次男は司馬遼太郎からとって遼太郎とつけられたそうです。今回、長男の継之介さんもいっしょに来館されており、正善さんは長年の夢であった長岡に来られて良かったと笑顔で話されました。  
(インタビュー/西川)

## 遠方からの客人

### ●インタビュー⑧ 継之助の強さに魅かれて

勉強家で商才もあつたんではないかと思ひます。  
館内を見ての感想は?

「感動しました!!」継之助の生まれたのがもっと早い時代なら違っていたのか、談判の相手が二十代の若者ではなく経験豊かな人物だったら、また長岡藩のような小藩でなく西国などに生まれていたならどうだったろう、日本は変わっていたらどうかとかいろいろ想像するんですが、彼が志半ばで亡くなったのは残念です。

講演会報告



村井重俊さんによる講演風景

三月に起きた東日本大震災で開催が危ぶまれた友の会総会、講演会、懇親会が四月二十三日に開催された。会は震災で犠牲になった方々へのご冥福を祈り黙とうで始まった。

講演会は約二〇〇名を超える多くの方が聴講された。講師は週刊朝日編集委員であり司馬遼太郎記念館『遼』編集委員の村井重俊氏が「司馬遼太郎を思う」と題し数々のエピソードを紹介。村井氏は作家司馬遼太郎氏が「街道をゆく」という連載をされた時、番記者として氏が亡くなる迄の六年間を担当された。村井氏は氏の大ファンで担当を言われた時は大変嬉しかった。が、当初はなかなか上手くいかず、段々慣れてくると色々な事が見えてきたという。氏は面白い話が多くの

稿をいつ書いていくか分からない程、人と話し、テレビを見、また話す。「たぶん午前中のわずかな時間に原稿を書いている」様だと気付いたこと、対談をまとめた人の苦勞が偲ばれる松本清張氏との、まるで果たし合いと思われる話や『街道をゆく』の挿絵を、二十年も一緒にしていたユニークな須田剋太さんが亡くなった時「やめたい」と言い出した氏の辛い気持ちを知り、もう氏の本が読めないのではと落胆したが、奥様の説得で連載は続いた。その時、奥様が氏の仕事を深く理解されていると感じたという。

また、村井氏は氏の小説はフィクションかノンフィクションかと言うと「書くべき材料があり、その人物を創作して書いているフィクションだが真のところは書く必要があるから書く、書くべきことを書いているノンフィクションだと思ふ」と氏の小説への思いも述べられた。そして最後に、長岡高等学校の二〇〇周年で氏が河井継之助語った「日本の歴史に河井継之助がいてよかった。風が吹けば直ぐそちらになびく。そんな民族は信用できない。日本の歴史の中には分の厚さを受け持っている人がいる。そういう人は得てして悲劇的な生涯を辿る。継之助の場合は長岡そのものを悲劇的な集団にして

(伊佐)

河井継之助記念館 友の会について

会員の交流や情報交換を通して継之助について親しみ、学び、記念館を応援する会です。

- 会員数/正会員：538名/協賛会員：57名(10/31現在)
- 特典/①友の会会報「峠」配付  
②会員との交流 ③催事案内・参加 ④研修旅行への案内・参加

会員募集中

- 入会手続き  
①申込書に会費を添えて、事務局へ持参。  
②申込書を事務局へ送り(郵送、FAX)、会費は銀行振込または郵便振込で納入。(手数料は本人負担となります)

- 年会費 ※会計年度は3月31日まで  
①正会員/(ア)小・中学生:500円 (イ)高校生以上:2千円  
②協賛会員/一口5千円(法人の他、個人でも可)

- 口座について  
・加入者名/ 河井継之助記念館友の会  
・口座番号/ 郵便局 00560-9-96432  
長岡信用金庫関東町支店 普1032829  
北越銀行本店 普1764663  
大光銀行本店 普3011256  
第四銀行長岡営業部 普1560562

※郵便局の場合は手数料無料の払込用紙が事務局にありますのでご利用ください。

- 友の会事務局/河井継之助記念館  
友の会ホームページアドレス <http://tsuginosuke.net/>

新入会員ご紹介

(平成23年4月1日~平成23年10月31日現在)

安達恵一郎	新潟県長岡市	柴田 彰	静岡県榛原市	藤井 盛光	新潟県長岡市
石神 壮	高知県高知市	鈴木 勝喜	福島県南会津郡	藤原 直士	新潟県新潟市
井上藤五郎	新潟県長岡市	鈴木 美希	新潟県長岡市	藤原 洋子	新潟県新潟市
今井 裕一	東京都調布市	関根 雄二	新潟県長岡市	前田 眺成	新潟県長岡市
今泉 恭子	新潟県長岡市	高野 直樹	兵庫県西宮市	松本 英二	新潟県長岡市
金子 勝己	新潟県長岡市	東條ミヨシ	新潟県長岡市	松山 美月	新潟県小千谷市
金子 浩一	埼玉県志木市	殿生 征志	栃木県大田原市	村竹 光生	新潟県十日町市
河井實之助	東京都杉並区	成保 俊一	新潟県長岡市	吉沢 敏夫	新潟県加茂市
河合 保人	愛知県名古屋	西脇誠五郎	USAハワイ州	吉野 勝己	新潟県長岡市
小林 将	千葉県船橋市	服部 光次	神奈川県鎌倉市	以上31名(アイウエオ順・敬称略)	
坂口 謹一	長野県塩尻市	早井 信英	新潟県新発田市		

編集後記

●今回初めての、そして待ちに待った「八丁沖ウォーク」でした。しかし前日から天気予報は雨マークが：やはり当日の朝は今にも降りそうな雲行きでしたが、いざ歩いてみると不思議なことに晴れたのです。皆無事にゴールをし、バスに乗り終えたのを見計らったかのようにパラパラと細かい雨が。様々な想いを抱え長岡城を奪還する為、必死に八丁沖を渡河した継之助の信念が、午前中だけでも晴れしてくれたのかなと、帰りのバスの中で物思いにふけりました。

この度、参加された皆様、協力してくださった地元の皆様、本当にありがとうございました。

(松山)



八丁沖ウォーク

編集人・稲川明雄 松山美月 伊佐春美  
神保智子 雙田幸代 西川里美  
猪俣爾六 瀧澤 学 渡邊静江  
構成 白鳥マリスキップ編集部  
印刷 高橋印刷株式会社